はじめに　8
時代の必読書／「経験」としての教養書／本書の構成

第1章　「純粋経験」の熱気を受けとめる　17
——西田幾多郎『善の研究』を読む
この本はむずかしいのか？／純粋経験とは何か／純粋経験の延長線上にあるもの／疑いえない「直接の知識」／個人的なものと普遍的なもの／神は無限の喜悦である／「善」はいかにして定義されるか／活動説による「善」の定義／深遠なる統一力としての「人格」／真の自己を知ること／宇宙的統一としての神／知ることと愛すること

第2章　「人らしい人」へ至る道　53
——阿部次郎『三太郎の日記』を読む
大正教養主義の代表作／三重の偽名／「不在の半身」を求めて／死と握手する／創造欲求と職業生活は両立するか／創造の二段階／「実存、神、真理、愛」に至るまで／宗教の原点とは何か／自己と実社会をつなげる／日本人と世界人／「人らしい人」となる

第3章　生と性の青春論　89
——倉田百三『愛と認識との出発』を読む
「青春は短かい」／三之助「の」手紙？／「生きること」への欲望／西田幾多郎への礼賛と不満／唯我論の牢獄から脱出すること／霊と肉の抱擁／矢内原忠雄批判／常識を捨て給え！／もっと強実なる人生を／奇妙な共同生活／「夢見ることを止めた時」

第4章　日本人の「自己開示」　123

——九鬼周造『「いき」の構造』を読む

この本が書かれるまで／「いき」の存在を会得すること／
媚態とは二元的可能性である／武士道的な「意気地」と仏教的な「諦め」／
四つの比較軸／「いき」の基準の探求／幾何学模様はなぜ「いき」なのか／
建築と音楽における「いき」／九鬼の普遍性の根源

第5章　考え続けることへのいざない　155

——和辻哲郎『風土』を読む

最初で最後の洋行から生まれた古典／寒さの中に「出ている」我々／
風土の型の発見／「本当か?」と「そうか」のあいだ／沙漠への驚き／
西欧の陰鬱／特殊形態としての日本／家屋の構造とデモクラシー／
考え続ける人

第6章　「私たちはどう生きるか」という問いへ　187

——吉野源三郎『君たちはどう生きるか』を読む

日本少国民文庫／複数の「自分」に出会う／アブラゲ事件の顛末／
「人間らしい関係」とは／生産は消費より尊いものか／ナポレオン礼賛への違和感／
「男らしく」謝ること／叔父さんのノートが途切れた後に／
熱い欲望を揺り動かす最後の問い

あとがき　219

はじめに

時代の必読書

老若男女を問わず、人生について思い悩んだことのない人はいないだろう。そんなとき、人はどうするか。

家族や友人に打ち明けて相談するというのは、最も普通のやり方かもしれない。だが、相手が身近な人間であればあるほど、本当のことはなかなか話せないものだ。悩みが深刻であればなおのこと、自分ひとりで抱え込んでしまうことが多いのではなかろうか。

そんなとき、書物に手がかりを求める人は少なくあるまい。何でもいいから目についた本を手に取って、わかってもわからなくてもとにかく読んでみる。すぐに答えが見つかるとは限らない。いや、おそらく何冊読んでも答えが見つからないケースが大半だろう。けれどもたまたま出会ったわずかな言葉をきっかけに、それまで靄(もや)がかかったように見通しがきかなかった風景がぱっと晴れ渡り、進むべき方向が見えてくることもある。

当然ながら書物との相性は人それぞれであって、ある人にとっては目から鱗(うろこ)が落ちるような思いのする本であっても、別の人にとっては何の興味も引き起こさないことはじゅうぶんありうることだ。しかしそれでも時代を超えて多くの読者に読み継がれ、悩みの解消に直接結びつかないまでも、多かれ少なかれ影響を与えてきた書物というものは確かに存在する。そして人はそれらを「古典」と呼び、共通の必読書として世代から世代へと受け渡してきた。

ところで私が大学に入学したのはすでに半世紀以上前の一九七〇年だが、当時の記憶をたどってみると、いわゆる古典とは違った意味で、多少なりとも知的関心のある者なら読んでおくべき「時代の必読書」なるものがあった。私の頭にすぐ思い浮かぶのは、日本のものでは丸山眞男(まさお)の『日本の思想』や吉本隆明(たかあき)の『共同幻想論』、外国のものではニーチェの『ツァラトゥストラ』やサルトルの『実存主義とは何か』などだが、もちろん人によって記憶に残っている本は異なるだろうし、身を置いている環境が異なったり少し時代がずれたりすれば、たぶんまったく違った著者や著作が挙げられるだろう。

しかし多少の幅はあるにせよ、当時は若い世代の指針となるべき必読書の見取り図のようなものがある程度共有されていた。それは時代精神を濃厚に反映しながらも、けっして一時的な

流行として片付けるわけにはいかない一群の書物が描き出す「知の星座」のようなものである。未熟な青年にありがちな教養スノビズムにどっぷり浸っていた私は、豊富な読書量を誇る周囲の友人たちに後れをとりたくない一心で、この星座の中を無我夢中であてもなく泳ぎ回っていた。今にして思えばいかにも幼稚な振舞いではあったが、半世紀もの歳月を経てみれば、その幼稚さもむしろ愛すべきものとしてなつかしく思い出される。

「経験」としての教養書

けれどもその後、半世紀以上の時を経て、インターネットが急速に普及し、紙の書物以外のメディアが主流となった現在、そのような星座はもはや存在しないかのようだ。私自身が大学の教室で接してきた限りの実感では、そもそも日常的に本を読む習慣のない学生が確実に増えているし、たとえ読んでいたとしてもその中身はばらばらであり、いわゆる「教養」としての必読書リストを思い浮かべることはほとんど不可能である。

その一方で、教養の必要性は昨今、しばしば強調されるようになっている。大学では一九九一年の設置基準大綱化によって全国の教養部が次々に解体され、このままでは総合的・俯瞰的な観点から知の全体像を把握することのできる学生が育たなくなるのではないかという危機感

が次第に広まってきた。この流れを受けて、二十一世紀に入ると教養への関心がふたたび高まってきたわけだが、近年はこの言葉が良くも悪くも流布しすぎたためか、とかく表層的・皮相的なレベルで用いられがちなきらいがある。「理系の人間にもある程度哲学的な教養は必要である」とか「歴史に関する教養がないと外国の企業エリートと話ができない」といったせりふはしばしば耳にするが、正直なところ、こうした物言いにはどこか胡散臭さがつきまとう。

試しに「教養」（あるいは「リベラルアーツ」）というキーワードに「哲学」、「歴史」といった項目を加えてネット検索してみると、似たようなコンセプトで書かれたと思しき書籍のタイトルが次々にヒットする。これは十年ばかり前から顕著に見られる現象のようだが、主として「有用な知識」や「大人の常識」を提供することを目指しているかに見えるこれらの書物は、確かに即時的・便宜的に役立つというメリットはあるにしても、本来の教養のコンセプトからはかなり遠いような印象をまぬがれない。

では、そもそも教養とは何であろうか。もちろん百人百様の考え方がありうるだろうが、私はそれを、尽きることのない思考への欲望として定義したいと思う。幅広く豊かな知識を獲得し蓄積するに越したことはないが、それ自体はけっして教養の本質ではない。それよりも、何か情報を得たいとか具体的なノウハウを身につけたいという実利目的はいったん捨てて、ただ

ひたすらにものを考えようとする無償の情熱こそが教養なのだと、私は思う。パスカルは人間を「考える葦」になぞらえた『パンセ』の有名な断章で「私たちの尊厳の根拠はすべて考えることのうちにある」（パスカル『パンセ』上、塩川徹也訳、岩波文庫、二〇一五年）と述べているが、これはそのまま「教養」という言葉の定義として読めるのではなかろうか。

したがって私にとっての教養書とは、雑多な知識を明快に整理してわかりやすく提示してくれる書物ではない。そうではなく、読み進めているうちに読者を純粋な思考の歓びへといざない、いつのまにか体ごと別の次元へと浮揚させてくれるような書物、言葉を換えていえば、それ自体がひとつの純粋で濃密な「経験」であるような書物、そうした書物のことを、私は教養書と呼びたいと思う。

本書の構成

こうした視点から、本書ではいささかアナクロニズムと見えるかもしれないことを承知の上で、日本語で書かれた何冊かの教養書を読みなおすことを試みてみたい。それらの書物が、ある時代の悩める若者たちに強く訴えかけ、少なからぬインパクトを与えてきたのはいったいなぜなのか。その理由を探る作業を通して、今日における教養のあるべき姿を逆に照らし出し浮かび上がらせること、そして可能であれば読者が「尽きることのない思考への欲望」を駆動させるきっかけとなることが、本書の狙いである。したがって、読者はいわば思考のトレーニングをするつもりでこの本を読んでいただければと思う。「鍛錬」だからといって、別に身構えることはないし、準備運動もいっさいする必要はない。私と一緒に、普段あまり使わない頭の筋肉を動かす快感を味わっていただければ、それでじゅうぶんである。

時代は明治末期から太平洋戦争前まで、とりあげる著者と著作は以下の通りである（刊行年順）。

1　西田幾多郎（一八七〇―一九四五）『善の研究』（一九一一年）
2　阿部　次郎（一八八三―一九五九）『合本　三太郎の日記』（一九一八年）
3　倉田　百三（一八九一―一九四三）『愛と認識との出発』（一九二一年）
4　九鬼　周造（一八八八―一九四一）『「いき」の構造』（一九三〇年）
5　和辻　哲郎（一八八九―一九六〇）『風土』（一九三五年）
6　吉野源三郎（一八九九―一九八一）『君たちはどう生きるか』（一九三七年）

これらはいずれも一世紀以上、あるいは一世紀近く前に書かれたものであり、世代的にいえば私の親が十代後半から二十代前半であった一九三〇年代から四〇年代に広く読まれていた書物である。その意味ではすでに「古典」と呼ばれるにふさわしい位置を占めていると思われるが、現代の若者たちはおそらく（『君たちはどう生きるか』を別にすれば）ほとんど読んだことがないであろうし、もしかすると著者の名前も知らないかもしれない。かく言う私自身、一応すべて大学時代に目を通しはしたものの、恥ずかしながらじゅうぶんに咀嚼できないまま何十年も書架に放置してきたものが半数以上を占めている。

だが、あらためて読み返してみると、これらの著者たちが例外なく正面から「生」の諸問題に向き合い、懸命に格闘し、自らの思考の軌跡をそれぞれのスタイルで言語化していたことがよくわかる。その一行一行からほとばしる真摯な情熱とエネルギーに触れてみれば、いずれの書物もまさに「経験」としての教養書と呼ばれるにふさわしいものであり、かつて青春の必読書とされていたことにはやはりそれなりの理由があったということが実感されるであろう。

ただし一見してわかるように、ここに挙げたのはすべて男性の著者によって書かれたものばかりである。与謝野晶子（一八七八―一九四二）や平塚らいてう（一八八六―一九七一）は彼らとほぼ同世代であるが、彼女たちの著作はやはり「女性」という属性に結びつけて読まれることが多く、そうした側面を切り離した普遍的な書物として受け入れられてはこなかった。

またこれらの書物の読者層についても、おそらく男性のほうが圧倒的多数を占めてきたのではあるまいか。つまり「教養」という概念自体が歴史的にジェンダーバイアスを内包してきたことは否定できないのであって、この事実は最初に確認しておかねばならない。ただしこの問題についてはまた別の考察が必要であろう。

以下で扱う著作については、すでにおびただしい解説書や研究書が書かれている。本書の執筆にあたっても参照した文献は少なくないが、どうしても必要な場合を除いて、それらに言及することは基本的に控えたい。紙幅の問題はもちろんあるが、それよりも、いっさいの先入観に囚われずにテクストそのものと虚心坦懐に向き合い、無垢な読者としてそこに書き連ねられている言葉と直に対話することが重要だと思うからである。

また、本書でとりあげる書物を未読の読者も少なくないと思われるので、それぞれの内容紹介にはある程度のスペースを割いたが、不要と判断される場合には適宜読み飛ばしていただいてかまわない。なお、特に断りのない限り、引用文中の傍点による強調はすべて原文どおりであり、必要と思われる箇所にはふりがなを付した。